

## 2003年度渥美奨学生のページ 「エッセイ」

蔡 相憲	「ビタミンI (愛) のある社会」	----- 18	
張 桂娥	「自分探しの旅、そして日本で見つけた宝物」	----- 18	
	フスレ	「東京のメロディー」	----- 21
金 賢旭	「留学を通じて得たもの」	----- 23	
	郭 智雄	「愉快的仲間たち」	----- 24
林 少陽	「私のクラスメートと日本語」	----- 25	
	陸 躍鋒	「私の留学経験」	----- 26
	朴 貞姫	「日本語を考える」	----- 28
ティシ・マリア	エレナ	「面白い日本の私」	----- 32
ヤマグチ・アナ	エリーザ	「日系人の叫び声」	----- 33
尹 熙淑	「オゴリ文化とワリカン文化」	----- 34	
臧 俐	「日本の教育研究に辿り着くまで」	----- 37	

## ビタミンI（愛）のある社会

チェ サンホン  
蔡 相憲

東京農工大学 博士（生物生産学）  
天安蓮庵大学非常勤講師（在ソウル）

日本でも、帰国後の韓国でも、テレビで料理番組が多いことにびっくりした。その大部分は、欧米の料理紹介が殆どであるように感じる。両国の経済が豊かになったこと、あるいは時代の変化に伴って、欧米型の食生活が日常的となり、現在では、色とりどりの料理の洪水の中で暮らしている。食べ物がなくて苦しんだ頃と比べて、飢餓とは無縁である反面、様々な成人病に苦しむようになった。また、命を自分達に捧げた野菜や魚肉類などの食物、農家の人達や食事を作ってくれた人々への、心からの感謝の気持ちが薄くなってしまっているようである。心からの「頂きます」は、「感謝、節制、節約」の気持ちを作り出す。そのため、食事をするということは、体に栄養補給をするということだけではなく、ある種のビタミンを私達に与えてくれる意味もある。それは、ビタミンI（愛）である。今から50年程前のある小学生が、私たち現代人に教えていることがある。小学校の教師だった指導教官の父親が書いた本の中で、小学校5年生の日記が紹介されている。

我が家では7人家族が全員、毎日朝食前に約1時間、それぞれの仕事をします。メー子の乳搾りが私の仕事です。6時半頃、祖父達が野原仕事から帰ってくるのを待って食卓を囲むのですが、祖父のつるつるはげた頭からはゆげが立ち、両親の額には汗が光って見えます。この頃は、もうお腹がぺこぺこです。お米はとても大切なので、白米だけのご飯はお盆とお正月だけ。麦飯、小豆飯を主にして、芋、カボチャ、大根等その季節のものを炊き込んで食べます。おかずも、納豆や鉄火味噌、うち豆汁等、家でとれる大豆料理です。「我が家の食卓にはビタミンI（愛）があるから皆元気で、何年もの間、病気をし

た者もない」と父は言います。小豆飯を次々におかわりする様子を見て祖父は、「ああ、おらの家族は皆元気で、何より幸せなこった」と喜んでくれます。



食事だけではなく、学校、家庭や会社等、社会全体が欧米一色に染められてきているように感じるのは私だけだろうか？韓国人と日本人の体型には合わない欧米一色化の影が、あまりにも気になってたまらない。

### 自分探しの旅、 そして日本で見つけた宝物

—中国、台湾、日本、アジア、そしてグローバル  
社会との出会い—

ちょう けいが  
張 桂娥

東京学芸大学大学院（学校教育学—言語文化）

### ✿宝の1 中国籍留学生と出会って、自分の国の ことがよく見えるようになった

1996年春、台湾生まれ育ちの私は、中華思想の儒教教育システムで深く根付いている「中国人」としてのアイデンティティをもって、日本の大学に留学してきた。国際色豊かな留学生寮における2年間の共同生活のなかで、数的にも圧倒的に多い「本物」の中国人留学生と出会った。

同じ「炎黄子孫」（漢民族であることを誇らしげに自称する表現）でしかも共通語の北京語を通じて、意思疎通にはまったく問題のない「バリアフリー」

のコミュニケーション環境に安堵したせいも、彼らと出会った最初の頃から、根拠もない「同文同種」の仲間意識が先にあって、中国人同士の感覚で積極的に声をかけたりして交流のラブコールを送った。

しかし、こうした一方通行の同胞愛に基づく親善友好交流活動の行方はやがて、相互理解への高まる期待とは裏腹に、私自身にとつてもなく大きな変化をもたらしてしまったのである。

私って、本当に「中国人」なのか？なぜ、本物の中国人たちと会話を交わすだけで、言葉では説明しづらい異様な違和感を覚えざるを得なかったのか。なぜ〈中国大陸出身の中国人〉のもの見方やものの考え方がないしもの感じ方などが、〈台湾出身の中国人〉の我々とはこんなに違って、価値観すら根本的に異なっているとしかいいようがないのか。

こうして様々な疑問と内心の葛藤と格闘していくうちに、《中国人と台湾人が同じ祖先を持つゆえに固い絆で結ばれる兄弟の仲だ！》なんて甘い先入観が、目の前に現れた個々の中国人を正しく認識するための予備知識にもならないし、お互いの文化背景や思想行動を理解するために必須な客観的視野を嚴重に侵食する悲劇を起しかねないことを発見した。そして、その事実気づくまで無駄な努力を重ねてきた自分の無知や愚かさ非常にショックを受けたのだ。

さらに本音を言わせていただければ、留学する前に心配していた《周りの日本人たちとうまく付き合えるかな？日本人社会にうまく溶け込めるのかな？》というカルチャーショックの問題よりも、同じ中華民族でありながら思う通りにコミュニケーションが成り立たない無力感や、中国人としても台湾人としても認めてもらえない挫折感のほうが、日本留學生活の中で、もっとも私を苦しませ落胆させる悩みの種だったといっても過言ではない。

かつて疑ったこともない中国人としてのアイデンティティを喪失して以来、私は、「中国人」と自称することに、ひどく戸惑いを感じはじめ、「中国人ですか？」と聞かれるたび、「いいえ、違います。私は台湾人です。」と躊躇せずに答えるようになった。中国人と出会って一年余り、正真正銘の台湾人として生まれ変わった私と、同じ経験を体験した留学生は少

なくない。これは、日本留學の道に進んだ台湾留學生の自己存在を確立する道程かもしれない。

いま振り返ってみれば、当時同じ寮に住んでいた中国人留學生たちは、勉学的にも経済的にも何らかの形でダブルプレッシャーに圧迫されており、精神的にもまったくゆとりのないぎりぎり一杯の生活を余儀なくされた。その上、留學生寮の共同生活がゆえに避けがたい小さな衝突や数々のアクシデントに見舞われる緊張感たっぷりの日常生活の中で、穏やかな人間関係を維持するためにどれほど神経を消耗するのか、想像するに難くない。政府の派遣や文部省の国費奨学金に恵まれた他国出身の留學生たちと同じような付き合い方を、彼らに望んだのは、確かに合理的な考え方ではないと反省しなければならない。

後の祭りのような後日談はさておき、結論から手短かにいうと、私は日本留學のおかげで、本物の中国人と出会った。そして、幸か不幸か、彼らとの出会いは私の人生にとって、台湾人としてのアイデンティティを芽生えさせる重大な「運命的な出会い」の一つでもあったのだ。

## ✿ 室の2 国際交流に熱心な日本人と出会って、パワフルで多彩なアジアを誇りに思うようになった

日本に来てから、韓国、タイ、中国、香港、 Bangladesh、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス（五十音順）などアジア圏の留學生たちと一緒に、学校や地域主催の国際交流パーティと異文化交流フェスティバルに何回も参加した。なにしろ、国際化を目指す日本社会では、外国人留學生のみでなく、いろんな理由で日本滞在中の外国人たちを対象に、彼らの異国生活に役立つことをしたり、異文化交流を通して国際理解のスタンスを深めたりすることに、非常に熱心に取り組むボランティア団体が数多く存在しているのである。

もちろん、日本語や日本文化を学ぶために日本留學を果たした私たちにとって、こうした日本人と間近に交流できる有意義な集いに招待されるのは、本

当にとってもありがたく貴重なチャンスだ。私自身も声をかけられると、できるだけふるって参加するように考えており、いつもいっばいの感謝の気持ちでそれぞれの交流の場に足を運んだのである。

ある交流パーティでの出来事だった。大学側の留学生を代表して出席した私たち（いずれもアジア圏出身の留学生）が入場後、いつものように情熱な日本人たちに囲まれ、参加者たちと各々の一期一会を楽しむことになった。私の周りにも3、4人の40代～60代のおばさんが集まり、故郷の台湾の話や日本人の暮らしの風景や日本文化・社会についての疑問や日本人の考え方など、世間話や雑談を交えてにぎやかな会場に花を咲かせた。そのうち、一人のおばさんが時々会場をちらちら見回って、それから少しがっかりしそうな表情で私にこうたずねた。「張さんの学校は〈外人さん〉が少ないようですね。今日は誰も来ていないみたいですね。」「ああ、そうですね、確かにあまりいないですね。」と周りをみながらさりげなく答えた私。

しかしその直後、冷静に考えてみると、「私って、外人じゃない?!」《日本人にとって、外人って、欧米圏やアフリカ圏出身の人たちのことかな?それじゃ、同じアジア圏出身の私たちって、いわゆる外人じゃないってこと?》《そもそも日本人が望んでいる国際交流って、どんな〈外人さん〉との交流なのかな?》……甚だ未熟で自信がないせいか、他人様の何気ない一言をひがんでとる私は、被害妄想が膨らんでくるにつれて、不快指数もどんどんエスカレートしてゆき、つい興ざめな気分にかけて、後味の悪い気持ちで足早に会場を去ってしまった。

その後も何回か似たような経験をしたり、同じアジア圏の友人からまったく同じような体験をしたことを聞かされたりして、そのうちに、最初みたいに激しく動揺することもなくなり、「そういう日本人もたまにはいるよね」って笑い飛ばす余裕すら出てきた。

それから何年間か経って、傷ついた気持ちを持ち直して反省してみると、自分が外人じゃないことを悔やんだというよりも、台湾人だって外人だよ!と主張する勇気がなく、日本人の憧れる「外人」に嫉

妬したり勝手に引け目を感じたりして、変なコンプレックスを抱いた自分が悔しくてたまらなかったのだらうと、ようやく気持ちの整理ができた。

その時の悔しさや、小さなプライドがぐっさりと突き刺さるような耐えがたい痛みは、いまでも時々思い出している。そのたびに、自分の国のことをもっと自信をもって、アジア圏全体のことをもっと誇りに思って、堂々たる人間としていろんな「外人さん」と対等に交流しないと本当の国際理解はありえないと、自分自身に言い聞かせている。

もちろん、いまだに欧米系の「外人さん」に異常なコンプレックスをもっている日本人たちにも、ぜひひびく日本ことやアジアのことは見直して、お互いが立派な人間同士であることを心底から認め、そこから真の国際交流をスタートしてほしいと願ってやまないのである。

例の出来事をきっかけに、私は、周りにいる大勢のアジア出身の留学生たちを見る目が徐々に変わった。インド、インドネシア、ウイグル族、内モンゴル、韓国、カンボジア、シンガポール、タイ、中国、フィリピン、香港、バングラデシュ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、ラオスなど、アジアの隅々から、先進国日本という巨大な磁石に吸い込まれ、素晴らしい夢をもって遙々来日した優秀なアジアの留学生たちが、本当に周りに大勢いるのだ。彼らたちとめぐり合うチャンスに恵まれたとき、私はいつも大切に思いながら、それぞれの国の話を興味深く聞かせていただけるように懇願しているのである。

いまさらといわれても、まだじゅうぶん間にあうだらうと思うが、《多様多彩でカラフルなアジアの魅力をよく感じ取れる力こそ、国際理解を推進する大事なエネルギーであり、パワフルなアジアの隣人たちの素晴らしさをよく理解しようとする心こそ、国際人になるためのはじめの第一歩である》という信条の励行が、いまの私にとっては重宝に勝る座右の銘である。

偉大なる理想とは程遠いが、良識のある立派な国際人になる前に、まず堂々たる台湾人、そして堂々たるアジア人になることを自己に期待しているので

ある。

8年間の日本留学を経て、半人前だった私は、台湾人としてのアイデンティティのみでなく、アジア人としてのアイデンティティもしっかり持ち合わせようとする国際人への道のりにたどり着いた。そして、少し前まではまだ理解不能に近かった中国人のことも、いまなら少しずつ分かってきて、もっと素直にコミュニケーションできるようになったような気がした。漢民族同士という狭き視野を破棄し、アジア人同士としての相互理解のスタンスを拓くのは、今後の個人の楽しみであり、台湾人としての重大な課題でもある。

### 【進行形+未来形】

### ✿宝の3 A I S F & S G R A と出会って、国際化のグローバル社会を視野に

この冊子をご覧になった皆様は、私が日本で見つけた3番目の宝物が何か、もうお分かりいただけるかと思う。

渥美国際交流奨学財団と関口グローバル研究会と出会って以来、国際社会に貢献するために、私には何ができるのか、何をすべきかと自問自答をくりかえし、いまでも地球市民としての一個人の役割が何かを考えさせられる日々である。理想的な答えなんてないかもしれないが、まず自分にできそうなことからスタートするしかないと思う。

長い間、温かく見守ってくださり、心強い支援をくださった皆様、ありがとうございました。近い将来には、力強く空高く羽ばたいて飛翔する大鳥のように、お励ましのお言葉をバネに、希望に満ちている未来へ一直線、そして、広い世界の舞台で頑張っているA I S F & S G R Aメンバーの輪に加わり、グローバル社会の一員としての責務を果たす夢を実現させたい。

## 東京のメロディー

フスレ  
Husel

東京外国語大学大学院(地域文化)

それは、4年前の夏のことだ。臨時帰国する前に、一日のバイトを終えて、秋葉原の電気街に行って土産を買おうと思った。改札口を出ると、麗しく響き渡るメロディーが耳に入った。目の前には、民族衣裳を身に着けた南米の何人かの若者がおり、民族楽器を弾きながら、歌って踊っている。心を打つ感動的なリズム、魅力あふれる美しいメロディー、その騎馬民族特有の風格の民謡は、わたしを強く引きつけた。

島国日本の首都東京で、このようなメロディーを聞くことができるとは思わなかった。同じ騎馬民族だからだろうか、その熱のこもった、豪放なメロディーの魂をすぐ悟った。故郷の高原、オオタカ、駿馬、ゲル……、その光景の一こま一こまが目の前に甦ってきた。一日に流した汗、蒸し暑い天気、バイトの疲れ、留學生活のつらさは、すべて忘れてしまった。

一昨年の春、妻も留学のため日本にきた。わたしは妻を連れて、上野公園に行った。その目的は花見だけではなく、音楽専攻の妻に東京芸術大学のキャンパスを案内するということがあった。意外にも、上野公園で、再びその南米の若者たちと会った。妻もその曲に感動を受けた。後ろ髪を引かれる思いでその場から離れて、東京芸術大学に向った。

しかし、そこで思いもよらない光景を目の当たりにした。美しい桜の木の下に、ダンボールや青色のシートでつくったテントらしきものが倒れかかりながら、東京芸術大学まで繋がっていたのである。これを見て、ほんとうにびっくりした。先進国日本にもこのように家を持たない、野宿せざるを得ない人がいるのだ。しかも、日本の芸術のエリート大学のキャンパスの周りを囲むようにならんでいる。中国

の大都会の駅に寝泊りする出稼ぎの若者の姿が目の前に浮かんできた。来日当初、このような不調和な風景を見ることはなかった。このような雰囲気なのかで、東京芸術大学のキャンパスに入ったのだが、その時の気持ちは形容のしようがない。

同じ風景が新宿都庁の高い建物の下の、都庁公園にも見られた。都庁公園の青いテントは、上野公園のそれより立派なようであった。こちらの一部のダンボール小屋には、窓もきちんと造ってある。ゴミを食うカラスが叫びながら、ダンボール小屋の主人と一緒に、日の光を浴びている。日本経済の不景気を身にしみて感じながら、言い表せない感覚が生じた。この落ちつかない不協和音は、日本の伝統的な優美なメロディーを傷つけているのではないかと感じられた。

あの南米の若者たちは、新宿駅西口にも現れた。毎月2回、渥美奨学財団でマルコム先生が講義する英会話教室に参加するわたしは、新宿を通るときには、必ずその若者たちの姿を捜した。どんなに忙しくても、足を止めて、その美しいメロディーをしぼし楽しんだ。ある日、乗り換えの際に、あの南米の若者たちの姿を捜しているとき、ダンボール小屋はすでにバス停まで迫ってきたのに気がついた。感嘆しながら、この不協和音はどこまで伸びていくのだろうと思った。

忙しい時、音楽を聴くと、最も善い休息になる。論文に夢中になると、2、3日休まず執筆するのは、わたしの癖であるが、数日にわたって論文を書いたあとで、音楽を聴くのはなんと幸せなことだろう。偶然にも、博士論文の執筆で最も忙しかったこの冬、頂いたチケットでオーケストラの演奏を聴きに行く機会が3回もあった。

1回目は、大学から頂いたチケット、NHKホールでおこなわれたNHK交響楽団の定期演奏会であった。指揮者は準・メルクル氏で、マーラー（1860～1911年）作曲の交響曲第2番八短調「復活」であった。テレビやCDで聴くのと違って、生の演奏の鑑賞は思わぬ収穫が多かった。2回目は、妻が入賞した日本語弁論大会の主催者である留学生支援会から送ってきたチケットで、異なる風格の東

京劇場での日本交響楽団の定期演奏会であった。そして3回目は渥美奨学財団から頂いたチケットで、渋谷の文化村のオーチャードホールで行われた東京交響楽団の定期公演であった。このオーチャードホールは日本最大規模のシューボックス型ホールであることを誇り、中は華やかな雰囲気だった。ホールは壮観で、演奏はさらにすばらしかった。指揮者はマーラー第6番の名演でヨーロッパ中を震撼させたジャスティン・ブラウン氏で、ピアノは日本人初のザルツブルク・モーツァルト・コンクール優勝者菊池洋子氏である。さすがに国際最高レベルのコンクールの優勝者、モーツァルトのピアノ協奏曲第24番の演奏は輝かしかつたし、弦楽器がメインとなるウェーベルンのパッサカリア、そしてブラームスの交響曲第1番は、チェロを専攻してきた妻にとっては、最高の心の糧であった。ジャスティン・ブラウン氏の指揮、全体の演奏を楽しみながら、自分が論文のクライマックスを執筆しているときに似た緊張感を覚えた。自分が論文を書いているのか、交響楽を楽しんでいるのかわからなくなり、狂気の状態になっていたようであった。今もその感覚を思い出すと気分が高揚する。

しばらくして、一通の手紙と一本のテープが届いた。実は去年の秋、北区の柳田小学校で短期国際交流活動を行うために、モンゴルの民族衣裳や、ゲル、馬頭琴、銀の茶碗などの工芸品、音楽のビデオ、CD、テープなどのお土産を内モンゴルから送ってもらい、生徒の皆さんと一緒にモンゴル語で挨拶をしたり、モンゴルの遊びをしたりした。郵便物はその小学校からのものだった。テープに入っていたのは、1年生の皆さんが歌ってくれた「心からそう思ったとき」、「まほうつかいに会いに行こう」という歌だったが、「まほうつかいに会いに行こう」の歌詞の最後の部分がオリジナルの「エメラルド」ではなく、「モンゴルの国」という風に変えられていた。それを聞いたときは、本当に驚いたし、1年生のみなさんの天真爛漫な笑顔を思い出しながら、とても感動した。これは私が日本に来てもらったもっとも大切な物の一つである。

これらは私にとっての東京のメロディーだ。

## 留学を通じて得たもの

キム ヒヨヌリ  
金 賢旭

東京大学大学院（総合文化—表象文化）

日本に留学に来て8年あまりの時間が経ちました。8年目が過ぎてやっと博士論文が出せるようになり、長かった留学生活も残りわずかです。私は、中世の能を研究しており、能の源流について考えてきました。主に、古代や中世の神仏習合、韓日文化交流の問題について勉強しています。このような私のまわりには、指導教官をはじめ優れた研究仲間が大勢いて、留学の間たくさんのことを教えられました。私が所属しているところは東京大学総合文化研究科の表象文化論専攻コースですが、ここで、長年一緒に勉強してきた院生たちは、専攻もさまざま、お互いに本当にいい刺激を与えあうことができました。

例えば、モンゴル演劇、能や歌舞伎などの伝統芸能や古典文学、また、映画を研究する博士課程の院生たちが集まり、アジアの表象文化論という学生シンポジウムを開きました。そのため、一年以上お互いの発表を聞き、批評しあいました。また、日本における渡来文化について考えようということで、「渡来神」についての研究会を長年続けてきました。こうした共同研究の結果、日本だけにとどまらない広い視野をもって自分の研究に取り組むことができたと思います。そうした仲間たちに支えられ、長い間有意義な留学生活を送ることができました。

一方、日本研究者として、また、韓日文化交流の仕事をしようとする私にとっては、研究者以外の日本人たちとの付き合いも多く、彼らから教わるものも少なくありませんでした。私は、子供二人をかかえての留学であったため、近所の付き合いはもちろん、子供たちが通う保育園と小学校で出会ったお母さんたちとの交流が深く、とても助かりました。能の観覧などで、私の帰りが遅くなる時には、喜んで子供の面倒をみてくれるお隣の老夫婦や、よく伝統

的な日本の食べ物を作ってくれる友人のお母さん、夜遅く差し入れをもってきて励ましてくれる知人のおばさん、助けてくださった皆さんの話はとうてい書くことができないくらいいっぱいあります。ある春の日、ゼミ旅行で初めて京都へ行きますと言ったら、次の朝早く玄関先には、「勉強も大事だけど、ちゃんと食べてね」という手紙と一緒に小遣いをいれた封筒がそっとおいてありました。こうした心遣いにも感動しましたが、ある日「安い自転車がほしいんだけど、どこで買えますか」と聞いただけで、その日の夕方には家の前に一台の自転車が届きました。近所にお住まいの80近いおじいさんが、安売りのチラシを見つけ、一時間ほど歩いて私の代わりに自転車を買いに行ってくださいました。その時の9,800円の安いけど、とても丈夫な自転車を7年くらい乗り続けています。今は85歳ぐらいになられたそのおじいさんが、「あまり空気がぬけたまま乗ると危ないよ」と、時々タイヤに空気を入れてくださいます。私は、こうした人情あふれる横浜の下町で、人々の心遣いいっぱい感動し、また、こうした方々を通じて生きている日本の文化を学ぶことができたと思います。

たくさんの日本人にふれ、付き合いをしながら私の学問に対する態度や目標は大きく変わりました。実は、最初は、日本の大学で博士号をとり、ぜひ教授になろうというのが、心の中に強くありました。ところが、だんだん日本と韓国の間をつなぐパイプ役をはたしたいということを大事に思うようになりました。現在の韓国には、一瞬見たり、聞いたりして、楽しいだけの日本文化が氾濫しています。しかしながら、表面的でない真の深いレベルでの文化交流を通じてこそ、日本文化の美しさ、おもしろさというものがわかるのではないかと私は思っています。少なくとも、日本について興味をもっている韓国の人々が偏らない日本観を持って、日本と付き合い合っていけるような環境を作りたいと思います。それが、ゆくゆくは、両国の調和へ、自国文化の発展へと繋がるものだと思うのです。

留学を通じて得た一番大切なものは、さまざまな層の日本人との付き合いによって与えられた忘れら

れない感動であり、それが、自分が日本研究や文化交流の仕事をやっていくための情熱になっていったということです。

## 愉快的仲間たち

カク ジュン  
郭 智雄

立教大学大学院（経営学）

私の日本生活はかれこれ8年と、思いがけず長いものとなりました。大学院の修士課程の2年を日本で過ごし、母国韓国で数年働いた後に、再び日本の博士課程で学生生活を始めて早6年になります。修士時代と変わったことといえば、結婚をし、かわいい娘の父親になったということです。しかし、妻子を韓国に残しての再留学のため、日本での生活は修士時代と良くも悪くも代わり映えのしないものです。とはいえ、やはり家族を残しての単身生活は、修士時代には味わったことのない孤独感に襲われることがあります。そんな、私の寂しさを紛らわしてくれるのが、私の周りの「愉快的日本人」です。私の日本生活で、私が受けた日本の印象といっても簡単に語りつくせるものではありませんが、とりわけ私が出会ったこの「愉快的日本人」の印象は強く、私の価値観の一部を形成するほど影響を受けました。私の日本人との出会いの場といえば、もっぱら大学院ということになりますが、大学院で出会った2人の愉快的日本人との出来事をお話しましょう。

まず、酒とともにやって来るA氏を紹介します。私はお酒をこよなく愛しているので、友人を誘い外に飲みに出かけたり、友人の家に飲みに出かけたりすることがありますが、友人がお酒を持って私の家をたずねてくることもしばしばあります。A氏は我が家をたずねてくるタイプで、約束もなくひょいっと現れます。そして、我が家に来るときにはきまってビール2本を持参するのです。「すぐ帰るから」が

決り文句でした。しかし、結局いつもビール2本では足りず、我が家のお酒の瓶を空にしていき、泥酔の上、次の朝帰っていくのがお決まりのコースでした。彼も地方から上京し、一人暮らしということもあってか、淋しかったのでしょう。そんな夜はお互い淋しさを忘れ、飲んで、話して、はしゃいで朝を迎えるのです。彼はよく飲み、よく話す男ですが、とりわけ話好きで、話題が途切れることはなく、楽しい話をたくさん聞かせてくれました。しかし、彼が来る時はきまって「今日も朝までか」と覚悟しなければならず、気が遠くなるほど夜を長く感じる日もありました。

次に、もう一人の「愉快的日本人」B氏のことを紹介しようと思います。B氏は修士時代には私の後輩であり、博士課程では先輩となった本当に愉快的な男です。彼の言動によって私のニッポン男児に対する印象が決定されたといっても過言ではなく、彼を通して日本の男性の面白さを体験することとなりました。

私とB氏は学会関連の仕事を任されており、研究面のみならず、一緒に活動する時間が多かったのです。私も彼も、学会で地方に行けば、最終日には打ち上げと称してうまいものを食べ、うまい酒を飲み、大いにストレスを発散していました。そんな彼は、博士課程では先輩ということもあり、常に私の日本語修正等のチューターを引き受けてくれており、その点ではいつも大変感謝していました。しかし、B氏はA氏同様に、いやA氏以上によく飲み、よく話す男ですが、それに加えてよく眠る男なのです。論文の日本語修正を引き受けてくれた彼をそうした欲求から引き離すことは本当に困難極まることでした。私の隣の机で作業をしていたかと思えば、見かけた後輩を捕まえて長話。さもなければいつのまにか隣の部屋で長電話。飲みにも誘われたと荷物をまとめて夜の町へ。珍しく集中しているなどと思えば、気持ち良さそうに眠ってしまっているではないですか。仕方がないので、別の後輩にB氏の監視役をお願いすることにしました。特に夜は要注意です。寝ていたらつついて起こしてもらい、進捗具合をチェックしては、遊んでいる暇はないぞとプレッシャーをかけ



てもらったのです。中でもとりわけ週末の夜は厳しくB氏の行動を監視してもらうことになりました。油断はできません。電話の内容をこっそり聞くと「飲みに行きたいのは山々なんですけどね。…なんとか終わらせて飲みに行けるようにします」なんて言っているのです。本当に手のかかるチューターでした。しかし、驚くほどに忙しい学位論文執筆中に、こんなに私の手を煩わせてくれたけど、B氏のサポートにはいつも感謝しています。

こんなA氏やB氏は、外国に来て一人で研究する留学生の私にとっては心の支えであり、本当に感謝する人物なのです。外国人として日本という国家に対する思いは様々ありますが、一人の人間として彼らに出会い、接してみて、国籍などとは関係のない人間の心の温かさを感じることができました。彼らは「よく飲み、よく話し、よく眠る」愛すべき愉快的日本人であり、彼らを通してニッポン男児は思ったよりも愛嬌があるのだなと感じ、心が和みました。しかし、よく考えてみると、この「よく飲み、よく話し、よく眠る」というのは、私自身のことでもあります。いや、むしろその点では二人に負けないかもしれません。こんな御気楽な気質は日本人の特質かと思っていきましたが、やはり国籍は違っても「類は友を呼ぶ」というだけのことだったのでしょうか？

## 私のクラスメートと日本語

りん しょうよう  
林 少陽

東京大学大学院（総合文化・言語情報科学）  
東京大学大学院総合文化研究科助手

私の大学は廈門大学という、中国の東南部の廈門市にある大学で、日本の旧帝国大学にあたるような古い大学です。山を背にしながら海に面したところにあり、石造の建築が多く、キャンパスが美しい大

学として有名です。

そのようなところにわが日本語科79年組の仲間が集まりました。79年というと、中国は文化大革命（66年—76年）で麻痺していた大学入試制度が回復して3年目です。1977年の進学率はわずか1.8%だったことから推測すれば、79年組もそんなに大差はなかっただろうと思います。クラスは23人で、福建省、北京市、上海市、遼寧省、浙江省、広東省からの学生からなっていました。文化大革命で溜まっていた人がほとんどで、入学する前の職業は、軍人、工場の労働者、農民（とはいっても都会から田舎に行かされた青年ですが）などでした。入学するときの年齢も25歳前後の人がほとんどです。私は最年少の15歳だったのですが、最年配のクラスメートは24歳でした。中国の大学は全寮制ですので、寮生活の中で年配のクラスメートから学んだものが多かったです。

クラスの人たちは入学する前はほとんどラジオ放送の日本語講座で日本語を学んだ人です。よっぽどの知的好奇心がなければ勉強はしないだろう、といまは思ったりはします。私は英語から移ったので、この人たちを追いかけるために必死でした（英語やロシア語から移った人が他にも二～三人いました）。最初の1年間、私は毎日1時間ほど海に向かって朗読することを習慣にしました。大きな声で、海を自分の忠実な聴衆と空想しながらあたかも自分が演説をしているかのように、リズム感を楽しみながら日本語を朗読しました。私には、語学の最初の段階にあるような苦は全くありませんでした。

この時代の日本のイメージといえば、日本の映画が圧倒的な影響力がありました。栗原小巻の『愛と死』は入学したばかりのころ、人々の人気を集めました。私もクラスの人たちと学校の映画館で見たのですが、少年の私は作中人物の喜怒哀楽をさっぱり理解することができなかったのです。でもクラスのほかの人たちは違いました。男女間の微妙な感情をすぐに分かる年になっているかれらは寧ろ熱狂的でした。この頃の人々は女性にお世辞をいうならば、「あなたは中野良子（または栗原小巻）に似ていますね」といったら絶対効果的でした（その後は山口百恵に

かわりましたが)。映画やテレビ・ドラマは普通の人々が日本を理解する重要なメディアとなりました。

ぼくらは遊び半分に、基本的にクラス全員に日本語の呼び名・あだ名をつけました。例えば、大平正芳首相にそっくりの人がいたので、かれの名を「大平正芳」と呼んでいました。私は運が悪く、1933年に殺された左翼作家の名である「小林多喜二」と呼ばれました。中国語では若い人に「小+苗字」と呼ぶ習慣があるからです。また、当時『姿三四郎』という日本からのテレビドラマがあったので、頻繁に恋人を変えているクラスのある男性のクラスメートにこっそり「朝三暮四郎」と日本語風のあだ名を付け、略して「三四郎」と呼んでいました。その相手の女性のクラスメートに「水性楊花子」を付け、略して「花子」と呼びました。中国語の4字熟語である「朝三暮四」と「水性楊花」から取ったものですが、いずれも異性に心変わりしやすいという意味です。決していい意味ではないです。そして、級長のことが嫌いだから彼に「大尻さん」という名を付けました。

私は日本語を学びながら大人になりました。

卒業式は夏の海辺で行いました。日本語の歌を歌いながら女子学生は泣いてしまいました。

79年組はいまでも仲間のことをこのような呼び名で呼んでいます。親しみを感じるからです。そして思い出が蘇ってくるからです。私たちの思い出はこのように日本語と不可分なものです。

## 私の留学経験

りく やくほう  
陸 躍鋒

東京海洋大学大学院（海洋情報システム）

初めて日本に来てから、あっという間にもう10数年が経ちました。その間に、一度中国に帰って、6年後、再び日本にやって来ました。合計で、私の日本留学経験は10年近くになります。最初、まったく日本語も分からなかった私は、だんだん日本語が上達し、日本での生活にも大部慣れてきました。今繰り返してみると、いろいろ思い出して、胸がいっぱいです。

日本に初めて来たのは1989年の3月で、ちょうど桜が満開の季節でした。成田空港から東京へ行く時、高速道路の両側には桜がたくさん咲いていてとても綺麗でした。今思い出してもまるで昨日のことのようにはっきり覚えています。新婚の妻を故郷に残したまま、未来に向かう私の日本留學生活が始まりました。

私の研究分野は情報工学ですが、せっかく日本に留学するチャンスなので、日本の近代化における技術発展、そしてこの発展を支えてきた日本の大学工学教育についても調べたい、それが私の当時の気持ちでした。日本語が下手な私は勉強することがかなり大変でした。辞書を調べながら、一字一字、本を読んだり、英語、漢字、プラス下手な日本語で先生とコミュニケーションしたりしました。一年後、私は中国に戻って、これらの研究成果として工学修士号を取得し、「日本の高等教育改革」、「戦後における東京工業大学の教育目標の確立」などの論文を発表しました。

日本に留学したこの1年、世界も激しく動いていました。中国では、天安門事件が起きて、ヨーロッパではベルリンの壁が壊れました。これらの一連の事件は世界を大きく変えました。世界の人々にも大きく影響を与えました。その1年は、私にとっても

もう一つ大きなことがありました。世界で一番可愛い、私の娘が生まれました。

再び日本に留学に来たのは、その6年後の冬でした。1996年1月から1997年3月までSTA特別研究員として、政策研の第一研究グループで「企業における技術進歩と人的資源開発」に関する研究に参加させて頂きました。その当時、私は、IT関連、技術予測などにも強く興味を持っていました。政策研での研究期間はわずか1年3カ月でしたが、私にはいつまでも心に残っています。この研究がきっかけで、日本の企業における技術進歩と人的資源開発に対する理解がより深くなりました。これまで、企業における技術進歩と人的資源開発に関する研究は別々に行うのが普通でしたが、私は、技術進歩と人的資源開発について、一つの企業システム内で互いに制約と促進する要素の内在的な有機的関連性に注目して、そのシステムの内部構造とメカニズムの解明を目指していました。後藤先生をはじめ、政策研の皆様からのご指導、ご支援をいただいて約3000の会社について調査研究をしました。私がとても感心したのは政策研における研究の雰囲気です。いろいろな学術分野、いろいろな産業部門、いろいろな国からの人々がここに集まってきて、お互いに協力して、いろいろな視点から、いろいろな科学技術問題に対して研究・ディスカッションして、発信しています。政策研は創造的な思想の場、発信源としてますます重要な役割を演じて、注目されてきています。このような研究所のメンバーとして研究できたことはとても光栄で、誇りに思っています。政策研で学んだのは自分の研究分野のものだけではなく、先端技術に対する感受性、異分野、異文化とのコミュニケーション、そして広域情報を収集、分析する能力です。

1997年4月、私は株式会社エス・イー・エイ (Science and Engineering Associates Corporation, Japan、以下SEA) に入社しました。SEAは潮流計や海底探査機、深海調査用カメラをはじめとした各種海洋観測機器の輸入販売、メンテナンス、及びお客様に対するテクニカルアドバイスをしています。SEAは、事実、これまでも海洋研究に欠かせな

い数多くのプロジェクトをサポートしてきました。例えば、深海底鉱物資源の調査、また地震予知を目的にした海底観測、さらには長期の気候変動を予測するための海洋観測等です。もちろん、その中には国家プロジェクトも多数含まれていました。この数年来、SEAは単なる観測機器の輸入販売に留まらず、独自のソフトウェア及びハードウェアのシステムを開発しています。私は海洋情報システム、データ解析などのソフトウェア開発を担当させて頂きました。

私はそれまでずっと大学、研究所で研究生活を送っていたので、会社で働く経験は全くありませんでした。あるきっかけで、私はSEA社長の中川氏と会いました。その当時、私は企業における技術進歩と人的資源開発に関する研究をしており、日本の企業システムを理解するために、日本の企業についてもっと知りたいという気持ちがありました。私は21世紀の先端技術動向にとっても関心を持っているので、いろいろ勉強しましたが、その中で気になったのは情報技術と海洋、環境技術の重要性と未来性でした。特に、北海道環境科学研究センターと北海道立中央水産試験場に調査訪問に行ったのがきっかけで、海洋、そして海洋科学技術に対して興味が高まっていました。縁があつて知りあつたとき、私が情報工学出身で、長い研究生活で育てた能力と政策研の経験を持つことがSEAにも役立つことを確信した社長から、入社のお誘いを頂きました。

もちろん、最初、企業、しかも日本の企業を全く分からない私としては、企業の生活に慣れるまでけっこう大変でした。単に仕事内容の違いではなく、立場、考え方、コミュニケーションなども大きく違います。その時、政策研での企業に対する調査研究や、政策研での異分野、異文化とのコミュニケーション経験が助けてくれました。仕事面でも、海洋情報システム、海洋情報データ解析などは広く、しかも学際的な知識と能力が要求されています。技術の日進月歩に伴って、知識の陳腐化も早くなっていました。継続的に新しい知識と理論を勉強しなければならぬと、私は実感しました。ここで、先端技術に対する感受性、広域情報の収集、分析する能

力などがまた助けてくれました。

SEAに入社以来、私はいくつかの研究・開発プロジェクトに参加しました。例えば、GPS (Global Positioning System) を用いた海洋調査用導航システム、海流情報を可視化するドップラー (Doppler) 潮流計測システム、超音波を用いた二次元海底音響画像を作成し、海底微細構造の探査のほか、漁場、沈没船、落下飛行機などの調査にも利用できるサイドスキャンソナー (Side Scan Sonar) 海底地形調査システムなどがありました。会社の社員が皆で協力して努力した結果、私達が開発したこれらのシステムは日本で多くの海洋研究、調査者に使われているだけでなく、海外にも輸出されています。2000年、私は東京商船大学 (現東京海洋大学) 情報システム研究室の大島先生と一緒に、海底音響画像からの三次元構造の再構成に関する研究を行いました。この結果は同年6月海洋音響学会で発表して、専門家達から好評を得ました。今、特許出願中です。

2002年1月、私は会社を辞めて、忙しい企業現場を離れ、今まで研究してきたものをまとめて、大学で「海底音響画像からの有用な情報の抽出と利用に関する研究」という博士論文に専念することになりました。「海底音響画像からの有用な情報の抽出と利用に関する研究」というのは、幾つかの新しい海中コンピュータビジョンの手法を開発し、それらを用いて海底音響画像を解析し、2次元海底音響画像から、今まで得られなかった3次元などの有用な情報を抽出することです。面白い研究ですが、難しさも分かっていました。

最後になりましたが、私の日本留学経験に一番書き漏らしたくないことは、2003年度渥美奨学金を頂いたことです。私は小学生の頃からいろいろな奨学金をもらいましたが、渥美奨学金はこれらと違います。この1年間、渥美奨学金は、もちろん、経済面でも私をサポートしてくれましたが、もっと意味深いのは、渥美奨学金のおかげで、いろいろな国から来ている人々と、文化の違い、分野の違いを超えて、研究会、懇談会、雨中の軽井沢などを通じて、心と心の交流をすることができました。人間の閉塞

性を超えてはじめて人と人との真なるネットワークができました。この1年、私は国境を超えて地球村の村民としての自覚を高めることができました。これからも、日頃いろいろお世話になっている皆様のご期待に背かないように続けて頑張っていきたいと思っています。

## 日本語を考える

バク ジョンヒ  
朴 貞姫

明海大学 博士 (応用言語学)  
明海大学非常勤講師

長年、日本語と付き合いながら、思いついたことについて、一筆書かせていただきます。

### ◆あいまいな日本語の利点

「あいまいな日本語」は、日本語の特徴の一つで、否定的な見方も少なくない。しかし、「あいまいだから」といって、一概に否定するのも理不尽であろう。かえって、日本語はあいまいだからこそ、便利であり、都合よく使われているのではないか。

日本語は、情的であいまいであるが、中国語は、論理的でストレートである。日本語の仕組みを分析すると、日本人の性格が見えてくる。中国語を「説得言語」というのなら、日本語は「察知言語」と言える。

中国語は「自分自身の生の目で世界を見る訓練をし、それを自分とは異質な人々に向かって表現しようとする」のに対して、日本語は「直に世界とは関わらず、先例や有職故実を参照しながら、身の回りの事物に既成の意味を与えている社会的・文化的な約束を理解し、それを自分と同質の人々に向かって暗示しようとする」。

中国語は「対象を自分自身の手で記号化しようとし」、日本語は「察知言語は、すでに記号化された対

象によりかかって、その操作にのみ習熟しようとする」。したがって、中国語は、創造的、日本語は応用的と言ってもいいだろう。

あいまいな日本語に対して「直示的」「明示的」な中国語はどれもきつい感じまでさせる。言葉がコミュニケーションの手段として使われる以上は、その場に相応しい言語の表現が最も合理的である。日本に長い多くの在日中国人は、日本語と中国語を都合に合わせて要領よく使い分けている。中国人同士の間の会話でも、だいたい日中両言語を混用しているのが普通であり、しかも、その使い分けが驚くほど上手である。

たとえば、拒絶の姿勢を示すときには、中国語を使い、「不！不行！（だめ、だめ）」「不可能的（それは不可能ですよ）」と言ったりする。しかし、それが頼みごとの場合には、日本語で「ちょっと、お願いがあるんですけど」とか、「あのう、たいへん申し訳ございませんが」とかで持ちかける。また、はっきりした返答を求めるときには、「你怎么想？（あなたは どう考えていますか）」と、中国語で問いかけたりし、適当に言葉を濁したいときは、「それはちょっと…」とか「そうですね、ちょっと考えておきましょう」と、日本語で答えたりする。おおよそ、論理的でストレートな表現は中国語で、情的であいまいな表現は日本語で行うところが共通しており、中国語と日本語を使い分けている。

不思議なのは、自分でも日本語を使うときは「おとなしく」「優しく」「戸惑いがち」の人格に、中国語を使うときは「手ごわく」「厳しく」「堂々たる」人格に変わっていくような気がする。こうした事実は、使用する言語の違いによって私たちの性格も大きく異なってくることを示している。言語の力は凄いもので、その言語に相応しい人間を製造することができるのである。つまり、日本語は、比較的におとなしく、「戸惑いがちで」、「あいまいな」国民を生み出し、中国語は比較的「きつく」「理屈っぽく」「堂々とした」国民を生み出す。「無愛想で、冷たく、厳しい」人格の私も、日本語のお陰でたまには「大人しく、優しい」人になることもあって、日本語に感謝している。

万物は千差万別で、人間の考えや言語様式も決して一律ではない。異文化間の接触では、「あいまいな日本語」こそ、人間関係を和らげ、平和なムードを作るのに最適な言語ではないかと、私には思える。

今の私は、「あいまいな日本語」に慣れ、馴染み、日本人とだけでなく、中国人との会話でも、直接依頼表現や拒絶表現をされたりすると、不愉快な感じがするので、相手に婉曲で「あいまいな日本語」を使わないと気がすまない。あいまいな日本語は、人の気持ちを慰め、不必要なトラブルを避け、人に安心感を与えて穏やかなムードを作ってくれる「平和的言語」である。

残念ながら、「あいまいな日本語」批判の最先方を走っているのは、日本人自身である。もちろん、いかなる事物にも二つの面があって、「あいまいな日本語」にもマイナス的なところがある。しかし、「あいまいな日本語」には、プラス的な、肯定的なところがより多く、大いに発揚すべきである。こんな便利で素晴らしい言葉をもっている日本人として、これに誇りをもたないと、もったいない気がする。自分の長所を知らないと、盲目的になりがちであり、自分を知らない人は他人を知ろうともしない。自分にプライドをもたない人は、他人のプライドをも理解できない。一つの文化として定着した「あいまいな日本語」は、優しい日本人を生み出したばかりでなく、より多くの優しい国際人を生み続けている。

「文化とは、一つのところにじっとしていられる能力である。」（ジョージ・スタイナー）

#### ◆無責任な日本語の表現は正してほしい

日本人はよく「今度ね」という言葉を使う。日本にはもう5年なのに、この言葉には、いつも違和感をもたされる。最初にこの言葉を聞いたのは、日本に来たばかりのときのことである。日本人のAさんとは中国語で知り合い、日本で再会し、とても嬉しい気分だった。親しい仲ではないが、中国人の習慣では、「老朋友」の再会だから、飲みを誘うぐらいは当たり前のことである。そういう期待感があったからか、私はAさんに「今度、食事でもしましょう」

と言われたとき、本気でその誘いを待っていたのである。が、それが一週間経っても、一か月経っても、結局誘われなかったのである。今では、日本語の「今度ね。」という言葉の本当の意味は、ただの挨拶の言葉であることが分かっている。むしろ、それを知らずに本音と間違えていた自分が馬鹿らしく思われている。ただ、そのときの不愉快さ、「今度ね」という言葉に対する違和感は、たぶん永遠に心から消えないだろう。

なぜ、日本人は、本心でない言葉遣いをするのだろうか。「気持ちが悪くない」建前だけの無責任な日本語は、誤解を招くだけである。人間の人格は、言語行動で理解されたり、評価されたりするものである。ある意味では、このような「形式ぶった言葉」「心無き」言葉が日本人のイメージと繋がり、「日本人って無責任なのではないだろうか」という疑いまで持たされる。私には、未だ日本人の言葉のどこまでが本音で、どこまでが建前か、見当がつかない。正直いって日本人の言うことは、どうも信用しにくく、日本人との付き合いは、表面上で終わるケースが多い。

「今度ね」という言葉は、本当の約束をする場合にだけ使ってほしい。これは、日本に好感を抱き、日本語を酷愛する一人の外国人としての心よりのお願いである。

#### ◆「すみません」の転用に遺憾を覚える

現に日本のあちこちに溢れている「すみません」は、基の意味範囲を超えて使われている。辞書の解釈によれば、「すみません」は、人に迷惑を掛けたりしたときに使う謝罪の表現、あるいは、人に何かを依頼するときを使う依頼表現にほかならない。しかし、今の「すみません」の無分別使用には「あれっ！」と呆気にとられる。

たとえば、電車などで席を譲ってもらうなど、人に恩恵をもらったりする場合、相手に謝意を表し、ありがたい気持ちを伝える言葉をするのが当たり前である。しかし、この場合の日本語は、「ありがとうございます」ではなく、「すみません」である。最初はそれが納得いかず、不思議で堪らなかった。今で

は、「すみません」に聞き慣れているが、まだ、抵抗感があって、自分からは「すみません」とは絶対言わない。「ありがとうございます」でお返ししないと、気がすまないからである。毎日言語を操っているせいなのか、私はかなり頑固な面もあって、自分が不合理だと思ったり、自分に納得いかないことは、なかなか行動に移しにくい。どうして、人が自分のためにしてくれたのに、感謝の言葉ではなく、お詫びの言葉なのか。こっちは誠意をもって意思的にしてあげたのに、「すみません」と返ってくると、なんか馬鹿にされたような気がしてたまらない。私の論理では、「すみません」という言葉の基底には、話者の傲慢さ、つまり自分が一先ず他人に「席など譲らせてすまない」という、傲慢さが潜んでいると思われる。

もう既に「すみません」は、元のお詫びの意味を失い、軽い気持ちを表す謝礼表現に転用されている。転用されている「すみません」は、もう「気持ち悪くない」、「無心」のお詫び表現にすぎない。「すみません」のとんでもない転用は、他人の大事な気持ちを軽く見る、甘やかされた日本人の発想ではないかと思われ、遺憾をもたざるをえない。

#### ◆魅力的な日本語を大事に

私の知っている言語では、日本語のように細かく工夫された言語はまだない。英語は表記がアルファベットだけであり、中国語は表記が漢字だけであり（ピンインは音声記号で中国語の表記ではない）、韓国朝鮮語は表記がハングルだけである。これらに対して日本語は、漢字仮名交じりの便利な言語である。残念ながら、こんな素晴らしい日本語の魅力を知らないままの日本人も少なくない。日本語の魅力について、簡単に考えても次の幾つかが挙げられる。

##### 1. 漢字の利点について考えてみよう。

私は漢字が好きだ。漢字は、造語力が極めて強く、われわれに無限の言葉の世界を想像させる。日本語における漢字の造語力は、漢字の国である中国をはるかに越えて、語彙や表現を豊かにし、日本語の姿を美しくしている。私には、電車に乗っても、道を

歩いて広告ポスターや宣伝のチラシなどによく目をやるくせがある。

日本語に感心を感じたのは、「省エネルギー」という言葉だ（日本の交通施設は贅沢すぎて、エレベーターやエスカレーター（動く歩道まで）過剰にできている。そして、エスカレーターの乗降所に書いてあるのが「省エネルギーのため、…」である）。この「省エネルギー」は、「節約する＋エネルギー」の仕組みで、中国語では“省＋能”となる。いずれも「V（動詞）＋O（目的語）」構造からなっている複合名詞である。日本語の漢字の力って、すごいなあ！日本語の漢字は外来語とも組み合わせることができるのだ！私は「省エネルギー」という言葉に、再び漢字交じりの日本語の魅力を感じた。

漢字仮名交じりの日本語だからこそ、このような面白くて明確な造語が可能なのだ。同じ漢字文化圏であっても、韓国朝鮮語の場合は、漢字を廃止したので、このような造語は不可能である。韓国語にも音読みの漢字語彙が50%あるが、そのほとんどは中国語あるいは日本語から輸入したものである。韓国語における植民地以来の漢字語は、ほとんど日本語から受け入れたものだろうと推測される。たとえば、「欠航」という言葉である。

2年前に韓国へ行ったときのことである。名所の「雪嶽山」見物が韓国旅行の目的だったが、台風で「欠航」だったので、結局目的未達成となった。最初の便だったので、朝早く出発したが、空港で4—5時間待たせられた。韓国語で「결항 kyeorang（欠航）」の知らせがあったが、最初は意味が読み取れなかった。「결항 kyeorang（欠航）」って、何なのだろう。とにかく固有語ではない。漢字語だろうと推定してそれを中国語にしてみてもそういう言葉はない。それで今度は日本語にしてみた。なるほど、日本語の「欠航」だったのだ。「欠航」の製造国は日本であろう。「欠航」のことを中国語では“停飞”、“停航”という。日本語の「欠航」は受身的で、中国語の“停飞”、“停航”は主動的である。

漢字は、簡単明瞭で、きわめて凝縮された表現をすることもできる。中国人が日本にいても親しみを感じられるのは、漢字の力である。日本語の漢字の

凝縮表現は、中国語と同じである。たとえば、

- ・ 入国管理局→入管
- ・ 東京外国語大学→東外大
- ・ 家庭用電気→家電
- ・ 公衆道徳→公德

などなど、このような例はいくらでも挙げられる。

漢字は意味を伝えることのできる表意文字の典型的な姿でもあるわけで、漢字文化圏の中では、方言や外国語の境界を越えて意志相通ができることを示している。音声を捨象したままでも意味を伝えることができる漢字を廃止しなかった日本語は、その利点が実に大きい。それに、今の日本語は、漢字のメリットに見合った簡略化も、漢字制限もされているので、昔のように漢字が負担でありすぎる時代では、なくなっている。

2. 漢字仮名交じり文の効用について考えてみよう。

日本人は、ひらがな・カタカナ・漢字・ローマ字という4種類の文字を書き分けながら生活している。これは世界にも例のないことである。残念ながら、日本語の便利さを意識していない日本人はまだ多い。そればかりか、意識されるとしたら、今度は逆に周囲の国々（欧米）と比較して、4種類もの文字を使い分けているのは、いかにも効率が悪かろう、という発想になってしまう。自分にプライドをもち、もっと自愛すべきなのに、自己懷疑のスタイルの日本人は、自分の宝物まで悪いのではないかと疑っているのだ。

3. 漢字仮名交じり文の利点を考えてみよう。

和語の滑らかさと漢語の力強さとの取り合わせで、日本語の文にはメリハリがついてくる。次の仮名だけの文と漢字仮名交じり文を比べてみると、その利点がすぐ分かるだろう。

- ・ にわにはにわとりがにわいる→庭には鶏が二羽いる。
- ・ はははははじょうぶだ→母は歯は丈夫だ。
- ・ 風がピューピュー吹いている。
- ・ マルクス以降のヨーロッパ思想

日本語は、漢字・平仮名・片仮名の役割分担がはっきりしている。カタカナ書きは、外来語や音声として捉えられ、漢字は浮き上がって、速読に便利である。また、日本語の漢字と仮名との取り合わせには、単にそうした感覚的な効果ばかりでなく、「詞(内容語)」の客観性と「辞(機能語)」の主観性とをうまく案配したり、名詞的構文や動詞的構文の割合をかなり自由に加減したりすることの利点が挙げられる。要するに、日本語は「漢字仮名交じり文」というスタイルによって、これだけの柔軟性をもっているのである。

5000から7000種類もあると言われている世界諸言語の中で、日本語ほど構造と意味が対応し、内容語と機能語の区別がはっきりされ、品詞の区別がはっきりしている言語はまだ知らない。私の外国語習得経験からしても、日本語は日朝中3言語の中で最も学びやすく、使いやすい言語である。それに音声上からみても、日本語は単母音言語なので、複合母音を作れる基本材料を十分に持っている。要するに、日本語の単母音を組み合わせると、世界のあらゆる言語も表記可能である。「日本語母語話者は外国語の勉強に向いていない」とよく言われているが、私はこれも否定したい。

日本語は、音声的にもリズム感があって、美しく、魅力的である。文字・表記においても世界中唯一に4つの表記が合理的に交ざっていて、感覚的な効果もあり、理性的漢字の客観性と情的仮名の主観性もうまく案配された素晴らしい言語である。今の私は、日本人の代わりに日本語の普及を世界に呼びかけた気持ちでいっぱいである。

## 面白い日本の私

ティシ マリア エレナ  
Tisi, Maria Elena

白百合女子大学大学院 (児童文学)

大学3年生の時に、日本文学の授業で川端康成のノーベル賞受賞講演『美しい日本の私』を読んだ。その後、ちょうど私が初めて日本に来た時、大江健三郎もノーベル賞を受賞し、『あいまいな日本の私』という講演をした。もちろん私はノーベル賞を受けていないし、彼らのような著名な作家の立派な話におよぶはずもない。しかし「私の日本」について書きながら、彼らの講演を思い出した。それは、私の日本での生活について考えると、彼らの賞と同じくらいすばらしい経験を「受けた」と感じているからかもしれない。

確かに、日本は「美しい」と「あいまい」という形容詞が似合うと思うが、私の場合、浮かんでくる言葉は「面白い」である。だから「面白い日本の私」について述べようと思う。

日本に来てから「面白い」という言葉を何回も聞いた。「マリア・エレナは面白い」というコメントもよく聞いた。それは、ほめられているのだろうか、それとも、からかわれているのだろうか。分かってきたのは、「面白い」は好意的であって、否定的な判断を示すつもりではないということだ。「面白い」はただ面白く、それ以外の何物でもない。

日本は面白い。日本人も面白い。日本に住んでいることも面白い。

大学には、春休みと夏休みと冬休みがある。秋休みはないが、文化祭のために1週間の休みがある。休暇が多い。怠け者日本。

外国に比べるとまだ犯罪が少ない。安全な日本。

言うまでもなく真面目な日本。通勤電車は、その雰囲気満ちている。しかし夜の電車は、居酒屋風になる。飲んべえ日本。

食べ物の話が好きで、旅行雑誌の半分以上は料理



の記事で埋まっている。グルメ日本。

若者だけではなくて、真面目なビジネスマンもキティちゃんやミッキーの銀行通帳を持っている。携帯電話のストラップにもキャラクターが付いている。かわいい日本。

日本人はよく我慢している。並ぶことが好きみたい。悪くもないのに、すぐ謝る。不思議な日本。

物価が高いと言われているが、道で何でも配っている。安い日本。

「滑りやすいので、注意してください」「忘れ物しないでください」「閉まる扉にご注意ください」。親切な日本。しかし繰り返しすぎるので、うるさい日本。

仕事中はとても親切なのに、職場を出ると人が変わる。電車で人を押しつけて座席に座る。失礼な日本。

何でも予想する。雨、雪、台風だけでなく、花の見頃、花粉の場所と量、洗濯情報。便利な日本。

冬にサンダルを履き、夏にストッキングを履く。季節感のない日本。夏は寒くて、冬は暑い室内。あべこべの日本。

日本は動いている。地震が多いからではなく、本当にいつも新しいものがある、変化している。進化する日本。

真面目で、怠け者。高く、安い。親切で、失礼。矛盾が多い日本。

年配の駅員がキティちゃんのパスネットを真面目な顔で販売しているシーンを見ると、笑いをこらえられない。本当に日本は面白い。

このような例は百科事典が書けるぐらい挙げることができる。結局この多面性は私の面白い日本を作ったのだろう。

外国に住んでいけば、どこの国であろうと初めから面白い発見が多いと思う。特に私の場合は、世界の反対側にある国に来たので、文化と習慣が違うのは不思議なことではない。10年程日本で暮らし生活には慣れたが、相変わらず日本を面白いと感じている。まだ毎日思いがけない出来事が起こり、日本での驚きには終わりが無い。ときどき当惑させられるが、「しょうがない」ので、それも楽しむことにし

ている。しかし、これはホンモノの日本なのだろうか。それとも私は日本ランドで遊んでいるだけなのだろうか。

## 日系人の叫び声

ヤマグチ アナ エリザ  
Yamaguchi, Ana Elisa

一橋大学大学院（社会学）

私たちは高度成長時に安易に入国させられ、そのつけが現在苦悩として重く身に降りかかっています。私たちは正門から入国を可能にされているにも拘わらず、その後、それは私たちにとってサイドドア的なものであったことを思い知らされます。なぜなら入国では正門でも、その後の暮らしの中で様々なサイドドア的な出来事が身に降りかかっているからです。

私たちは血統主義のもとで入国が出来たにも拘わらず、誰よりも差別の対象になっているのが間違いのない今日の現状です。日本人に外見が似ている私たちを日本人に対して違和感を持たせないために、「透明人間」のような存在になってしまっています。私たちは外見だけではなく、心もあることを忘れられかけているのではないのでしょうか。文化的にも習慣的にも大きな違いがあるために、実際にいろいろな問題は発生しています。例えば、子どもたちの学校のいじめ問題や生活の不安定や集住地の形成等です。

私たちは幸いにも長く日本にいられる、その反動（日本で仕事及び作業期間や職種が母国では継続できず、又自分の地位も維持出来ないのが現況）で帰国は単なる夢物語的なものに過ぎなくなり、帰国が神話になっていきます。

私たちは「保護政策」のもとで入国したにも拘わらず、労働条件や環境に無理があり、私たちの子どもたちを保護できず、その結果多くの子どもたちが

犯罪に手を染めているのが現実です。

私たちは大学卒であっても、ほとんどの場合工場では流れ作業しかさせてくれません。手と足が動く限りは工場で使ってくれるが、その後は私たちの生活に何の保障もありません。私たち個人としての能力を発揮できる場もなく、体力的に衰えるばかりです。

私たちは幸いにも合法的に日本と母国を行き来できますが、家計を支えるために家族は両国にまたがって生活をせざるを得ないような状況にあります。その結果、私たちの家族がばらばらになっています。

私たちは日本と母国の間を継続的に移動して、どちらの国にも定着できない状態におかれています。その結果、子弟の教育、文化、アイデンティティなどに大きな問題が生じ、子どもの将来像を描けない現状に直面しています。日本生まれの日系人の子どもたちは、トランスナショナルな環境で育てられ、新たな「国境なき人間」になるのか、それとも「根無し草」的人間になるのか、その両者の間で揺れています。

このままの状態が続くならば、「私たちって将来があるのでしょうか！」

## オゴリ文化とワリカン文化

ユン ヒスク  
尹 熙嫩

東京大学 博士（材料工学）  
独立行政法人産業技術総合研究所研究員

私に「もっとも苦手なことは何？」と聞くならば、迷わずに「作文とお描き」と答えます。理工系の人みんなそうであるとは思いますが、私は一作の作文をするよりは、3本の論文を書くほうが楽に感じられます。なぜおしゃべりは好きなのに、作文がこれほどいやなのかは、私自身もよくわかりません。恐らく、専門書以外は読書をほとんどしないために、

作文をする力が身につけていないからでしょう。渥美財団から、なるべく「私を感じた日本、あるいは、ここが変だよ日本人」などについて4000字ほど書いてくださいと課題を振られた時から既に3ヶ月ほど経っている様な気がします。締め切り日が過ぎた今も、ずっと重荷に感じているだけで筆が進みません。しかも、私が来日してから既に8年もの時間が過ぎている今は、日本をほとんど他国と感じられなくなっているのです。何について書くべきか本当に難しいです。最初に日本に来たころ感じた異文化に対する戸惑いの記憶を一生懸命に思い出させて、また現在においては日本で感じる異文化よりは韓国に帰国した際に感じる違和感からいくつかの例をあげて、不束な表現ながら書いてみたいと思います。

### ◆オゴリ文化とワリカン文化

現在の韓国人がどうなのかは良く分かりませんが、少なくとも私ぐらいの世代のほとんどの韓国人は、ワリカンについて少し違和感があります。日本に長く住んでいる私でさえも、自らワリカンしようって言うにはなんとなく戸惑いを感じます。ケチと思われるがちだからです。韓国では、会計カウンターの前で誰が奢るかについてもめている光景をよく目にします。「今日は私が」、「いや今日こそ私が」のようにお互いお金を出したがるやや変な光景も、「今日はあなたの奢りでしょう？」、「いや～今日こそ君が」のようにお互い奢ってもらいたがる見苦しい光景も目にします。韓国の社会では、上司が部下に、年上の人が年下の人に、男が女に（この項目については必ずそうではないのですが）、お金を持っている人が持っていない人になど、ワリカンよりは一人が支払いを済ませるのが一般的なのです。奢ってもらった人は、必ず次の食事代を払わなければいけないという負担を感じる必要もありません。先生や先輩に奢ってもらった学生は、一人前の人間になった時に自分の後輩や学生に、または昔お世話になった先生にご馳走をするなど、いつか誰かに自分がもらった分を与え伝えればいいのです。韓国人はこれを「情」と呼び、大事にしています。しかし、これが必ずしも良い訳ではありません。奢る人によってはこれが大きな負

担になるからです。物価が高い日本での生活では特にそうです。日本での生活が長い留学生同士では暗黙の内にワリカンが一般化になっています。しかし、日本での生活が長くない後輩や友達などとお酒を供にすると、お酒が進むにつれて不安さを感じ、大きさに言うとお酒が喉を通らなくなる時もあります。なぜなら、相手は当たり前のように奢ってもらおうと思っているわけですが、それを払うことによって私の一ヶ月の小遣いが全部なくなるはめになることもあるからです。そうなれば、気持ちよく奢るわけにはいかないし、「情」という言葉で済ませるにはあまりにも痛みが伴います。また、食事や飲みに行つて今日は誰が奢るのかなと詮索することで、食事やお酒がまずくなることもないでしょう。しかし、私は今でも日本人のワリカン文化を素直に全部受け入れることはできません。学校で先生と学生が1円まで細かくワリカンをする光景や、缶コーヒー1つでも奢ってもらったらすぐに奢り返す友達関係、焼肉屋でカルビを一人前ずつ頼んで自分の分だけを1枚ずつ焼いている光景などは、どうも苦手です。「奢り文化」と「ワリカン文化」がうまく融合できれば、「情」が溢れながらも、お互い迷惑をかけない良い人間関係が作れるのではないのでしょうか。

#### ◆誕生日を祝うのはどっち？

8年前に日本に来て初めて迎えた誕生日に起きたささやかなトラブルです。私は当時ビジネス学校に通っていて、多くの日本人の友達がいました。私の誕生日をきっかけに韓国料理を友達にご馳走しようと思って前日からたくさんの料理を準備し、友達を招きました。呼ばれた友達は、最初は喜んで食べていたものの、私が誕生日であることを告げると、啞然とした表情で“なぜ？”と疑問を私に投げました。私は彼らが何について疑問を感じているのかがさっぱり理解できず、「何が？」と答えたら、友達は「今日はあなたの誕生日なのにどうしてあなたが料理を準備し、ご馳走をするわけ？」と聞きました。そうなのです。韓国では祝うことがある側がみんなにご馳走をすることが当たり前なのですが、日本は逆だったわけです。私の友達は、韓国料理をご馳走しても

らったことは嬉しいが、自分たちの役目を私が奪ったことに疑問を感じ、怒ったのです。お互い違う文化に戸惑いながら、作った料理を取り敢えず食べ、パーティをしぶしぶお開きにしました。しかし、1、2時間後、チャイムが鳴り、外に出て見ると、誕生日ケーキやプレゼントをたくさん持った友達が「最初からやり直し！」と叫びながらパーティを開いてくれて、一日に2つの国の誕生日習慣をお互い体験したのです。その日以来、誕生日やお祝い事は奢ってもらうことが私の中で当たり前になり、今では韓国人同士で韓国式のお祝い事をするとなんか損をした気分になります。人間って自分に有利なことに早く慣れるみたいです。これって私だけなのでしょうか？

#### ◆実用よりは見栄え

韓国を旅行したことがある友達に、「韓国人ってスレンダーで美人が多いよね。なぜ？」とよく質問されます。しかし、私は「そうかな。あんまり感じたことがないな」とつい思ってしまいます。なぜ日本人の目にはそのように映ったのでしょうか。昨年の休みに帰国した時、何となくその理由が分かったような気がしました。デパートの入口や駐車場の案内をする人、また、街頭販売員や焼肉屋の店員までも、多く人が集まって目立つ所には、韓国中の美人を一箇所に集めて置いたように、本当に綺麗な人がいるのです。韓国に住んでいた時は、これを変だと感じたことはありませんでした。しかし、久しぶりに帰って見ると、なぜあの人をここで雇う必要があるのかなと質問したくなりました。例えば、韓国のデパートの駐車場の入口に立っている女の人は、しっかりメイクをし、真冬でもスカートのスーツを着、手を一生懸命に振りながら、笑っています。駐車場の案内員も男女を問わず、綺麗な服を身に着けている若い人です。日本では滅多に目にすることがない光景です。一般的に日本では、お年を召した人が再就職先としてこのような仕事をしているケースが多いです。また、それで十分な仕事で合理的な人力の使い方だと思います。確かに、綺麗な若い人が案内してくれる方が嬉しいのかも知れません。しかし、若

い人には若い時にできる、若い人を必要とする仕事があると思います。また、このようなお年寄りでもできる仕事は、お年寄りにチャンスを与えることによって、社会全体の失業率も下がるはずです。

韓国では採用をする側だけでなく、その仕事をする側にも問題があります。日本で感じたことは、仕事場では、年齢に関係なく、役職に応じてお互いの関係が決まります。「私が年上だから待遇されるべき」という安易な考えは持っていないように見えるし、だからこそ元気な老人達が多いような気がします。韓国では、そのようには行きません。仕事より年齢が先になることが多いのです。サービスをする側の人が、自分より若い客にダメ口を聞いたり、尊敬してもらおうとする偉そうな態度を取ったりする時がしばしばあります。これでは仕事になりません。その上、韓国人は見栄えを大事にします。近所に出かける時もしっかりメイクをし、安い賃貸のアパートに住んでも人並みの車は乗らないといけなく、安いものを食べても良い服を身に着けようとします。もちろん、すべての韓国人がそうであるわけではありません。しかし、多くの人が見栄えがいいものを好む傾向があることから、デパートでもレストランでも、高い給料を払って綺麗な女性を使うでしょう。

#### ◆英会話の勉強

私は韓国でも日本でも英会話学校に勤めたことがあります。両国の英会話学校の雰囲気および学生の熱意には大きな差があります。韓国では小さい子供から大人まで必死に英会話の勉強をします。その熱意は並大抵なものではありません。実際に、私も大学生の時は、朝6時から9時の3レッスンと授業が終わってからの夕方のレッスンを毎日受けました。それでも、また自分で必死になって勉強をしなければなりません。就職を予定している人はもっとそうです。そのため、英会話学校の講師のレベルも高いし、採用する側も良い先生にはマンションや車を提供するなどいろいろな条件を出し、必死に良い先生を求めます。しかし、日本ではこのような光景はあまり目にしません。就職の際に要求される英語のレ

ベルもそれほど高くないし、英語を必ずしゃべれないといけないという社会の雰囲気ありません。そのせいか、英会話学校を訪れる学生層は、海外旅行のためや外国人との付き合いなど趣味を目的とするOLが多いです。英語の講師も大学も出ておらず、英語教育に必要なテクニックを見つけていない人が多いです。学生の方があまり気にしないからです。授業に来る人も毎日のレッスンを必要としません。そのため、韓国のように月単位ではなく、レッスンの数でクーポン券を販売するところが多いです。英会話があまり身近にはなれないのは、授業料の問題もあるようです。日本の英会話学校のレッスン料を聞いて最初はびっくりしました。高すぎます。私が以前勤めていた学校では100レッスン（100時間）で25万円ほどでした。一時間2,500円！これでは、気軽に毎日通うわけには行きません。韓国ではその4～5分の1程度の金額で授業が受けられます。確かに、自分の国の言葉さえもちゃんとしゃべれない子供に英語の教育をさせ、自分の専門分野よりは英語の勉強といった逆転してしまった韓国の学生達の学業にも疑問を感じる部分は多いです。しかし、外国人が多く訪れる日本であり、外国人に接するチャンスが多い日本であるからこそ、英会話学校の料金などのシステム整備によって、多くの人が気軽に英会話を習えるように、日本の英会話教育にも少し変化があって欲しいなと思います。

何を書けば良いのかわからないと初頭で書いておきながら、長々と書いてしまったような気がします。これが、作文が下手であることの証拠かもしれません。書いているうちに、この他にもたくさんの違いがあることに気が付きました。例えば、トイレで並ぶ習慣の差（韓国：各トイレの前、日本：トイレの入口の前）やエスカレータの使い方（韓国：あまり気にせずに両側に立つ、日本：立ち止る人の列と歩く人の列が区別されている）などです。私がここに書いたのはあくまでも私が感じた韓国と日本の差です。私は、外国での生活が長いせいなのか、私が外国で感じる私と違う部分を、国と国との差よりは、人と人との差として理解しようと努力しています。

ここで書いたことは、たまたま私が出会った韓国人の共通点と日本人の共通点であるかもしれませんが。決してすべての韓国人と日本人の差ではありません。どの世界においても、自分と違う文化や人に出会うのは戸惑いを感じますが、なかなか楽しいことでもあります。この文を読む人達もこの文章で分かる日本人と韓国人ではなく、自分たちがそれぞれの差を肌で感じ、私が感じた部分と比べてみる楽しい体験をぜひして欲しいと思います。

## 日本の教育研究に辿り着くまで

ソーリー  
臧俐

東京学芸大学連合大学院  
(学校教育学教育方法論)

私にとってはじめての日本とのかかわりはいまから25年前の外国語大学日本語学部への不本意な入学であった。当時、英語学部への入学ラインより点数が大幅に上回っていた私は英語学部に入れる確信を持っていたから、第2希望の欄も記入せよと言われた時に、何気なく日本語学部と記入した。結局、運命はわざと私をからかうかのように、この何気ない記入が私と日本との縁を結びきっかけとなった。

1979年から私は日本語学部の学生生活を始めた。最初のころは、日本語に専念するどころか、授業のときでさえも英語の単語を暗誦したりしていた。絶対に大学の4年間という時間を無駄にしないで日本語学部にいる時間を有効に使う、将来アメリカかイギリスへ留学してみせると密かに決心したからであった。結局、先生に「入学した以上は落ち着いて勉強しないと将来はどうにもならないよ。何事もやり続ければ、好きになる。」と幾度も怒られることとなった。私は本心では嫌だと思いながらもさすがに先生の言うことを聞くようになった。その後、はじめに日本語を勉強しはじめたら、意外にも日本語

は美しい言葉であることに気付いた。特に女性の発音の優しさときれいさは他の言語がとても及ばないことも分かって、次第に日本語が好きになった。

ちょうど当時は日中国交回復直後のころであった。日中友好の勢いもあって、日本を紹介する本や、日本社会を自分の目で確かめることができる映画やテレビドラマが一気に現れた。それまで残虐な侵略者としてしか知らなかった日本のイメージは、実に豊かで美しい国であり、国民は教養があり礼儀正しい人々であると、180度の大回転になった。特に、野坂昭如氏原作のアニメ「火垂るの墓」を見た後、日本への印象がさらに変わり、日本に関していろいろと考えるようになった。戦後の凄まじい廃墟から短期間に日本はどのように立ち上がって高度成長を成し遂げたのだろうか。なぜ、戦後50年も経ずに世界第二の経済大国になれたのだろうか。日本への興味関心もぐんぐんと高くなった。多くの資料で、日本が成功したのはその裏にある教育の力によるところが大きいと示された時から、「教育」という職業の重みが密かに私の心の一端を占め始めた。

大学卒業後、私は迷わずに教師の職業を選んだ。日本語が専門なので、母校である外国語大学の日本語の先生になった。しかし、11年間普通の教師を経験した私は、教育を左右するのは表面上は確かに個々の教師であるが、しかし個々の教師を左右するのは最終的には教育行政と教育政策であることに気付いた。そこで、当時すでに32歳になっていたが、私は突然日本留学の道に踏み出した。しかも、学ぶ専門分野をいままでさほど触れていなかった教育学の中の教育政策と決めた。

あれから9年の年月が経った。教育学の基礎学習から始め、教育学の修士を経て、現在日本の教育政策に関する博士論文の作成の最終段階にいる。私の日本教育研究も世間に宣伝された日本教育のいい面から今や戦後教育の問題点に移った。問題点を書くのは私の日本留学の初志ではないため、非常に戸惑った時があった。しかし、冷静に考えれば、問題点に対する反省も大切である。問題点を考察してこそ日本教育への全面認識が可能になるのである。しかも、本当の意味での日本教育研究になるのである。

このような考えに辿り着き、最近になってやっと気持ちの整理ができた。そして、研究の進み具合も順調になった。

いま現在、博士論文をまだ完成させていないが、最終的に絶対に完成させる決心である。この研究を通して、戦後日本の教育政策の問題点を指摘するだけでなく、高度成長期の日本と同じ歩き方をしている中国、さらに同じような世界の他の国々に再び日本の問題点と同じことを繰り返さないようにささやかなヒントとなるものを奉げることができれば嬉しいと思っている。